

人は何のために学び、何のために働き、何のために生きるのか？

佐野 之人*

Why Do Humans Learn, Work, and Live ?

SANO Yukihito *

(Received July 28, 2023)

学ぶのは働くためであり、働くのは、生き残り、よりよく生きる（幸福）のためである、というのがこの問いに対する一般的な回答である。しかし老いが深まり、死を前にすることでますます顕わになって来るのが「何のために生きるのか？」という問いである。同様にグローバルな規模で我々を駆り立てる得体の知れないシステムに酷使されつつ働く者にとっても「何のために働くのか？」という問いが顕在化しつつある。「働く意味」が不明瞭になれば、「学ぶ意味」も不明瞭になっていく。こうした傾向は今後ますます深刻なものになるだろう。それは人間が抱える意味と無意味の矛盾が歴史を通じて顕わになっていくことである。この矛盾が宗教・芸術・哲学の要求の源泉である。人間が本性的に矛盾を抱えるものである以上、こうした要求は誰においても前提できるが、同時に人間は本性的にこうした矛盾から目を逸らし、日常生活に埋没する。こうした状況にあつて人間が生きるのも働くのも自分がその身に生まれた「人間」を学ぶためであるとして、宗教・芸術・哲学を根幹に置いた生涯学習の可能性に言及した。

はじめに

ここでは、我々自身もそれぞれの問題に自ら哲学する主体として取り組むという姿勢で、この人類にとつてもっとも古く、かつつねに新しい問い、そして現今もっともさしせまった問いを、可能な限り他の思想家の名を出さずに自分の言葉で哲学してみたい。

学ぶのは何のため？

つい最近講義中に、学生（教育学部）に「君たちはここで何のために学んでいるのか？」と聞いたところ、「就職のためです」という明確な回答が返って

きた。以前、人文学部の学生に同じ質問をしたところ、「したい勉強ができるから」という回答も少なからずあったことを記憶しているから、おそらくこの問いに対する回答は学部の特徴を反映するのだろう。しかし他の大学の人文学部であれば、学者になるという目的で「就職のため」と考える学生もいるのかもしれない。少なくとも私が尋ねた学生は「就職？ 知るか、そんなもの」といった感じであった。しかしおそらくは就職と切り離して学びたいから学ぶ、という意志を持って大学で学んでいる学生は少数派に属するのだろう。

私は以前、附属中学の校長を3年間務めた。校長挨拶の折に入学とは何か、卒業とは何か等、何々とは何か、といった哲学的な問いを投げかけた。「校長

* 山口大学教育学部 〒753-8513 山口市吉田1677-1 sano@yamaguchi-u.ac.jp

の部屋」を「哲学ルーム」として昼休みに生徒が訪問できるようにした。こうした営みを通じて、中学生の中には哲学に対する関心や興味があることを感じることができた。また附属中学ということもあって、彼らは「発問」中心の所謂「アクティブラーニング」に習熟しており、教科に対しても学問的な興味を持って素敵な考えを披露することができることにしばしば驚いた。しかしそうはいっても彼らのほとんどが、学校を終えれば塾へと急ぐ。彼らの最大の関心事はやはり有名進学校への進学だ。彼らが学ぶ目的の中心に受験があることは疑いようがない。高校進学の先には大学進学があり、さらにその先には就職がある。結局彼らの大方も、学ぶのは働くためであるというのが本音だろう。

「働くために学ぶ」という考え方は、生徒・学生といった就学者のトレンドであるばかりではない。高度成長期を過ぎ、経済発展に陰りが見え始めたころから、規制緩和が進み、多くの大学・学部が乱立するようになった。加えて18歳人口の激減を近い将来に控えることが意識され始めると、受験生の獲得を巡って大学間で熾烈な競争が繰り広げられるようになった。企業はそれまで大学に「人間を育ててほしい」と言っていて、あくまで企業内教育を重視する風潮が主流であったが、次第にその余裕を失って大学に「即戦力」の育成を求めめるようになった。こうして資格を売り物にして受験生を確保しようとする大学が増え始め、大学教育は職業人教育に大きく舵を切ることになる。私は平成4（1992）年から平成22（2010）年まで地方の私立大学に勤務し、こうした流れを肌で感じることもできた。その後私は国立大学で勤務することになるのだが、そこでも政府主導で大学改組が進むことになる。この改革も少子化や財政難を背景にしたもので、基本的には学生定員の縮小を狙っているが、それを効率の観点、具体的にいえば社会に役に立つかどうか（貢献度）という尺度で行おうとする。運営費交付金を盾に取って、各大学にミッション（存在意義）を定めさせ、計画を立てさせ、その成果を評価させる。私は教育学部に所属しているが、存在意義はその地方における教員養成ということに特化される。もはや教育学部という名称も文科省の文面には見られない。教員養成大学・学部と呼ばれる。学部では教員を出さない非養成系の課程が廃止され、教員も教育現場で実務経験を持つ者の割合を増大することが求められ、大学院も教職大学院に改組を余儀なくされた。成果は端的にその地方における就職率、教職大学院で言えば定員充足率だ。すべてが社会の役に立つという視点からの改革であることは明瞭だ。もはや社会の役に立たない大学はその存在すら許されない。これまでの教養教育は大きく切り詰められ、替わって使える英語、パソコンリテ

ラシーが導入され、従来の一般教養科目は「専門バカ」にならないための資質能力を養うという視点から再編成される。こうして私立大学のみならず、国立大学においても職業人教育に完全に舵を切ったと言える。

小中学校や高校での教育ではどうであろうか。私が校長を務めていた附属中学校でも大学と並行して改革を迫られた。エリート校としての附属はもう要らない、地域に役に立つ附属に生まれ変われ、と言うのである。そのころ学習指導要領が改訂され、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）という言葉が流行語のようになっていった。字面は学びの本質に迫るもののように見えるが、その本質は「実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など、学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向う力、人間性など」とあるように、予測のできない現代社会を生き抜くために役に立つ資質能力の育成が主眼である。校長職を辞した後も学部の附属担当副学部長として引き続き改革に当たったのであるが、その頃から情報化社会に対応すべく、GIGAスクール構想（一人一台端末環境）が実現に向けて急ピッチで進められた。しかし最近の生成AIの教育現場への導入を見ても、情報化社会の流れの速さに教育が行って行っていないのが現状だ。

現在世界的な規模で情報化が猛烈なスピードで進んでいる。こうした情勢の中で企業や日本経済が生き残るために、それに相応しい人材の育成が急務となる。 「主体的・対話的で深い学び」もGIGAスクール構想もこうした社会的ニーズ（要求）に教育の側から応えたものと考えることができる。また社会的・職業的自立を目指して小学校から継続的に実施されるキャリア教育（早期退職者、フリーター、ニートの増大が直接の背景とも言われている）もこうした流れの中に位置づけることができる。

生涯学習はどうであろうか。リカレント教育やリスキニング教育が「働く」ことを目的としたものであることは明らかであるが、放送大学やカルチャーセンターなどはどうだろう。私が以前勤務していた私立大学では、法学部・経営学部といった従前の学部では受験生が集まらないため、両学部を合併してサード・ビジネス学部という、まさに職業人教育に定位した学部を平成16年に開設したが、その際その一つのコースにスポーツサービスクラスというものがあった。これは一方でスポーツアスリートをターゲットにしたものであったが、他方でアスリートではないが、それでもスポーツの好きな受験生をターゲットにして、将来スポーツ関連の企業への就職を目指すものであった。このコースには

スポーツ経営学の教授陣が招かれ、地域スポーツの研究だけでなく、実際に大
学を拠点とした「総合型地域スポーツクラブ」を開設した。多様目・多世代を
謳い、スポーツに限らずあらゆる文化活動をも含んだ生涯学習の一環と見做す
ことができる。最初は大学教員が主導したが、すぐに参加者主体の経営に移行
した。私はこのクラブに開設当初から関わっており、現在でも「哲学してみよ
う！」という講座を担当しているが、先日メンバーに「何のために学ぶのか？」
と尋ねた。メンバーの多くは年金生活者である。脳トレのため、人間を学ぶ
ことで他人にやさしくなるから、学びたいから学ぶ、といった答えが返って
きた。哲学を学んで優しくなるかどうか分からないが、これらの解答はほぼ
精神面での健康維持と趣味（楽しいからやる）で括ることができるだろう。こ
うした学びの目的はもちろん「働く」ではない。元気に楽しく生きるためであ
る。

働くのは何のため？

それでは働くのは何のためだろう。学生に聞くと異口同音に「お金」と答え
る。彼らに言わせれば、学ぶのは単位のため、単位は卒業のため、卒業は就職
のため、働くのはお金のため、お金は生きる（善く生きる＝幸福）ためである。
「生きる」ないし幸福ということは何をイメージしているかといえ、一戸建
てに住みたい・マンションに住みたい、結婚したい・したくない、子どもが欲
しい・要らない等々、様々な意見が出るが、それぞれにイメージはあるようだ。
学ぶのが就職のためというのは一面的であるが、働くのはお金のためというの
もそれに劣らず一面的だ。そこで「キャリア教育」をネットで調べて見ると、
あるサイトでは「働くことの意味をはっきりさせることができれば、それは人
生の目的をも明らかにすることにつながっていくことになる」とした上で、「働
くことの意味」を①お金②自己実現③社会に欠かせない歯車の一つになる④次
の世代にこの社会を引き継いでいく、の四つを挙げ、そうして最後に「働くこ
との意味を突き詰めていくと、このかけがえのない社会をいまの子どもたちへ
と引き継いでいくためという答えにたどり着く」とまとめている。これが「人
生の目的」ということになるのだろうか。しかしこれは「予測のできない現代社
会」という「主体的・対話的で深い学び」を掲げた際の文科省の時代認識とは
異なっている。ここでは「知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的と
なり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展
するようになってきている」となっていた。早期退職やフリーター、ニートに

なりかねない若者に「キャリア教育」を行うのであるから、生涯収入の話から
始め、働くことに生きがい（生きる意味）を見出させることが主眼になるのは
当然で、これからの社会はどうなるか分からない、などと脅かすのは趣旨に反
するだろう。しかし「主体的・対話的で深い学び」にせよ「キャリア教育」に
せよ、発想の根本は同じで、社会に役立つこと（社会貢献）と個人の生きがい
（自己実現）とが結びつくことで、社会も個人も生き残り、よりよい生活（幸
福）に与ることができる、と考えられており、おそらくこれが「働く意味」の
さしあたっての「正解」ということになるのだろう。

生きるのは何のため？

こうして年金生活者以外の個人にとっても、社会にとっても、学ぶのは働く
ためであり、働くのは、生き残り、よりよく生きる（幸福）のためであること
になった。しかしこの考え方には限界がある。年金生活開始の時期が後ろ倒し
になる傾向があるが、そうはいってもやはりいつまでも働けるといふ訳ではな
い。人は必ず働くことから引退しなければならぬ。そうなるともはや働くこ
とに生きる意味を見出すことはできない。以前は大きな家族の中で年寄りの役
割が重んじられていたが、核家族の進む中で働けなくなった年金生活者は、最
初に紹介したクラブでのアンケートに見られるように、何時までも元気で楽し
く生きようとする。こうして肉体的な健康のために様々なプログラムが提供さ
れ、健康や美容のための商品が出回る。高額の商品も少なくない。また人々は
ボケ防止のための脳トレを行い、人生を楽しく生きるための様々の趣味のサー
クルにも熱心に参加する。しかしこの考え方にも限界がある。年金生活という
経済的な制約ももちろんのことであるが、そもそも高齢者が年をとるといふこ
とは、これまで思い描いていた健康や幸福を失っていくことだからであ
る。まして死を前にすればどうすることもできないだろう。あるいは死の直前
まで希望を捨てずに前向きに生きるという生き方も可能かもしれない。しかし
その希望なるものにはたして意味を見いだせるかどうか、これが問題である。
私が講師を務めている地域クラブに参加している高齢者は実に生き生きとし
ている。しかし彼らはむしろ例外なのではないだろうか。働くことを唯一の生
きがいにしてきた者が退職後に趣味にも健康にも興味を持って、ゴロゴロと
テレビを見、そのうちにテレビにも興味を持ってなくなり、眠ってばかりいるよ
うになる、動かないから必然的に動けなくなっていく。これは一例に過ぎない
が同様のケースも少なくないのではないか。

働くのは生きるため、幸福のためというのは、もちろん働けなくなった後の生活も含めての考えだろう。しかし思い描いていた幸福は次第に失われて行く。あるいはそもそも退職後の人生に意味をうまく見いだせない。こうして老いが深まり、死を前にすることでますます顕わになって来るのが「何のために生きるのか？」という問いであろう。

こうした問いが起るのはどういう時だろう。人は自分が生き（存在し）、その存在に意味（価値）を見出すという在り方（自由）を決して手放すことはない。しかし人は自らが人間の身を生きたるという在り方を自分で置いたのでない以上、与えられた人間の身を生きたるということと自由とは矛盾する。「与えられてあること」と「自らの活動によって有る」こととの矛盾が苦しみや悲しみを伴って顕わとなる時、生きる意味への問いが起る。老いや病、死というものがそうした問いへの機縁となるはずに分かるが、そもそも人間の身を生きたるということと自分が、与えられた身と自由との間の矛盾をはらんでいるが故に、思い通りにならないというような仕方での生全体がそうした問いへの機縁となり得る。

「どうせ死ぬのになぜ生きるのか」。こうした問いは人間のあらゆる主体的な努力が、与えられた人間の生に使役され消費される虚しさを言っている。これまでの祖先も、これからの子孫も同じように生まれ、食欲や性欲、金銭欲、名誉欲、権力欲など（これらの欲の根源も暗くどこまでも分からない）に酷使されながら生き、そうして死んでいく。しかもそれは自分の生死でなくとも一向に構わない。無意味な繰り返し。世界がどこまで文明を進展させようと最後には終わりを迎えない。何かに無意味に使役されているという感覚は我々に生きる意味への問いを引き起こすだろう。

こうした感覚は懸命に働いているさなかにも起こり得る。近代以降個人にせよ、国家、企業と言った共同体にせよ、「自らの活動によって有る」ことが原理（近代的原理）となって世界が形成されてきた。それによって現在、企業、国家、経済、イデオロギー、科学技術、情報など、人間が作ったものが、グローバルな規模で、システムを成して動いている。そのシステムは「自らの活動によって有る」という近代的原理に従って、止まることを知らない。そうになると、個人、企業、国家などはそれに駆り立てられ、使役されることになる。加速度的にそのスピードを増し、どこへ行くのかも分からない。誰もがシステムの歯車となる。成功した者も失敗した者も歯車であることに変わりはない。交換可能だ。名を挙げた者もその者でなければならぬということはない。

その者でなければ別の者がそれにとって代わっていただけのことだ。このようにシステムによって酷使される中で懸命に働くことの意味が問いと化す。「私はいかなるために働くのか？」。

働くことの意味が不明瞭になれば、「働くために学ぶ」と考えられてきた「学ぶ意味」も不明瞭となるはずだ。それでも個人は働かなければ生きていけないし、学ばなければ働けないのであれば、学ばざるを得ない。企業や国家もさらに自らを拡大させなければ生き残れないから、有能な人材（歯車）を育成すべく、個人を教育しなければならぬ。

こうして生きることも、働くことも、学ぶこともその意味が空洞化しながらも、我々はその虚無から目を背け、ひたすら生き残るために、学び、働かなければならぬのである。

人間の矛盾

生き残るために生きる、こうした自己目的という近代的原理は、歴史を通じて個人においても、世代交代という形で人類においても、システムという形で歴史そのものにおいても顕わになりつつある。自己拡大しただただ繰り返し繰り返すように感じられる。こうして「何のために生きるのか？」という問いはそもそも「生きる意味はあるのか？」という問いになっていく。

すべてが無意味な繰り返しに駆り立てられているに過ぎないように見えても、我々は知り得ないけれども、実は（これ）と言うことのできない無限の意味が我々にはあり、それは我々一人一人の一生を貫いた使命という形で、あるいはそのつど応答すべき行為として課せられているのではないか。あるいはたとえ我々の生が何かに無意味に使役されているにしても、そうした無意味の繰り返しの一瞬一瞬を生きることに意味を見出す生き方も考えられるかもしれない。

しかしこうした「意味付け」もやはり自我の側からなされたものである。意味があつてほしいという願いがそこにある。そのことは逆に言えば自我がその根柢に無意味を抱えていることを証している。我々は無意味を直視することができずに何かに意味を求めてそれにとびついているのである。我々は無意味を嫌う。意味を見出せなければ我々は行動ができないからだ。我々は日常的な行動のすべてに一々取り立てて意識はしなくても意味を感じている。意味付けの難しい状況に陥つても、それは訓練である、運命だ、というような仕方意味付けを行う。我々は意味の世界しか生きることができない。しかしそう

した自我による意味の世界の根柢が無意味であることも、上述の如く否定しようがない。我々は意味と無意味の分裂に引き裂かれ、両者の矛盾を生きている。こうした人間の抱える分裂ないし矛盾が宗教・芸術（文学を含む）・哲学の要求の源泉である。

宗教・芸術・哲学の要求

我々は自分の存在の根柢が矛盾であることを見たくないものだから、すべては現実の中で解決すべきだし、また解決できると思い込んでいる。こうして人生ほど明らかなものはないが如くであるが、そのことは逆に人生の根柢に隠れた矛盾の深刻さを証明している。人間は現実世界では宗教・芸術・哲学をまるが必要としないかの如くであるが、その根柢においてつねに宗教・芸術・哲学を要求していると言える。問題はこうした要求が人間の本性的な傾向によって隠蔽されてしまうということである。

人間が抱える分裂ないし矛盾が「哲学の要求」の源泉であるとしたのはヘーゲルである。その際ヘーゲルはキリスト教の内容を真実であると考えていたから、矛盾の解決はすでに宗教（キリスト教）のうちにあると考えることができた。それ故「哲学の要求」の遂行は宗教のもつ表象の形式を概念の形式に転換することに他ならなかった。しかし我々はこうした前提を持っていない。

我々は何らかの縁によって自らの内なる矛盾を自覚し、あるいは内なる要求に促されて、それぞれの機縁に応じ、ある者は救いを求めて宗教に、ある者は浄化を求めて芸術に、ある者は解決を求めて哲学に向う。しかしそれらと関われば関わるほど明らかになることは、人間の抱える矛盾を離れて救いや浄化、解決があるのではなく、宗教・芸術・哲学を通して自分がその身に生まれてきた「人間」をどこまでも学んでいかなければならない、ということであろう。

学ぶのは働くため、働くのは（老後も含めて）生きるため、と考える者は「生きるのは何のため？」という問いに早晚突き当たらざるを得ない。そうしてそれは人間の本性的な隠蔽傾向に逆らって、早晚「生きる意味」のみならず、「働く意味」や「学ぶ意味」を問い直さざるを得なくなるだろう。

学ぶ意味再考

グローバル規模の得体の知れないシステムがその回転の度を速めるにつれ、教育は職業人教育に変貌していかざるを得ない。なるほど現場（企業内）で行うにせよ、学校で行うにせよ、すべての者が働かなければならないとしたら、

現在、すべての者に職業人教育は不可欠である。しかしそれは人間の生涯を見据えたものではない。すべての者が受けなければならない義務教育の学校で教育目標として実際に掲げられているのは、15歳時の生徒像か、せいぜい10年後、20年後の人間像であろう。老いや死を見据えたものは皆無ではないか。しかし教育が自立の支援であるならば、職業人としての自立以前に老い、そして死ぬまでの人間の一生を見据えた「人間教育」でなければならぬだろう。

「職業人教育」が「人間教育」でないことは別の側面からも言える。「職業人教育」が育てるのは企業や国家経済にとつて役に立つ人材、その意味で「歯車」である。人間を手段として扱うことを目指す教育である。人間の一生を見据えた「人間教育」は「人間」としての自立を支援する教育、「人間」にまで形成する教育でなければならないだろう。

教職採用試験を受ける者の誰もが暗記しながら、そんなことは無理だとしてそれ以上考えようもしないのが、教育基本法第1条だ。そこには「教育の目的」としてまず「人格の完成」が掲げられている。それに続いて「国民の育成」が掲げられる。制定時に様々な議論があったようだが、何故「人格の完成」でなければならないのか、またその意味するところは何なのか、はつきりしたところは何も分からないままこの句がここに置かれることになった。その意味では、「教育の目的」が「人格の完成」でなければならない理由と、その意味するところを考えることが国民の課題となったと言つてよい。それ故ここでは歴史的な経緯を離れて若干の考察を試みたい。

まずここには「人格の完成」と「国民の育成」のみが掲げられている点に注意したい。人は誰しもが働かなければならないにもかかわらず、現在実質的に推し進められている「職業人の育成」については一言も述べられてはいない。次に「人格の完成」と「国民の育成」が区別されていることにも注意しなければならぬ。「職業人」が企業や国家経済に役に立つ人材ということで、それを育成するということは人間を手段として扱うことである。また役に立たなければその人間に存在価値はない。ここでは人間は「人格」として扱われていないと言えるだろう。それでは「国民」はどうか。第1条には「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」とある。これも平和で民主的な国家及び社会を形成するために、という目的のための手段として教育が考えられている。ここでも人間は「人格」としては扱われていないと考えるべきだろう。そうだとするとここでの「人格」は決して他の手段とならない、言い換えれば「人間として」以外の如何なる条

件も付かない資格という意味であることになる。制定以前には「人間性の開発」とすべきであるという意見（天野貞祐）もあった。その場合「人間性」とは「人間の全可能性」という意味であったという。この場合ですら人間を「人間性」人間の全可能性」という「人間」以外のもので条件づけることになる。改定時（平成18年）の文相（小坂憲次）は「人格の完成」について「各個人の備えるあらゆる能力を可能な限り、かつ調和的に発展させることを意味するものである」と述べている。この場合には明らかに人間を「能力」で押さえることになる。しかし第1条の文脈からすれば、「人格」とは決して他の手段となることもなく、如何なる条件も付かない「人間としての資格」ということではなければならない。この「人格」概念は「尊厳」という語に馴染みやすい。

また改定時には「完成」という語についても議論が交わされた。到達不可能なものを目標にするのはどうか、という疑義に対し小坂文相は不可能だから目指すと述べている。しかし「教育」が自立の支援であることは動かないだろう。自立とは一人前の人間になることである、というのも動かないだろう。しかしそれが到達不可能だということであれば、人間はいつまで経っても一人前にはなれないということになる。この文言を残すのであれば、別の解釈を考えなければならぬだろう。その解釈を試みたい。

人は誰しも自分のことを「人間」だと思っている。「人間」が何であるかは分かりきったものとされている。しかし自分がその身に生まれてきた「人間」はどこまでも分からないものである。古来人間の本質（何であるか）が様々な規定されてきた（理性的、自覚的、政治的・社会的動物等）が、これらの規定はすべて「人間」以外のもので人間を規定しようとしている。「人間」とは見なされた規定によって条件づけられ、そうした規定を欠くならば「人間」とは見なされないことになる。しかし「人間」そのものはこうした規定のいずれでもないことも明らかなことだ。むしろ「人間」とはこうした分かりきっていると言われている「人間」についての知が破られ、その無知が顕わになる所で立ち上がる目覚めの体験の言葉だ。「人格」という言葉も、その「尊厳」という言葉も、そうした体験の中で名付けられた言葉である。こうしたいわば「無知の知」が「愛知（哲学）」の無窮の営みを促すことになる。このようにどこまでも分からない「人間（人格）」に出会い、それをどこまでも学んでいく身が定まること、これが「人格の完成」である。それ故「人格の完成」とは道徳的に完全無欠な神の如き存在を目指すということでは決してないし、可能性としての、あるいは能力としての人間性を開発する、という意味でもない。何かに仕上がるので

はなく、逆にもともと自分がその身である、どこまでも分からない人間に帰り、そこから「人間とは何か」と問い続ける身が定まることを言うのである。

教育は自立の支援である。職業人教育であれば、職業人として自立できるまでの支援を行う。国民（公民）の育成であれば、国民（公民）としての自立を目指す。しかし「人格の完成」とは「人間」としての自立を目指す「人間教育」ということになる。その場合「人間」としての自立」とは、どこまでも分からない人間に帰り、そこから「人間とは何か」と問い続ける身が定まることである。そして現実社会に出る前に学問・芸術の世界でこれを行うのが学校教育である。如何なる教科も最終的に「人間とは何か？」という問いに行き着く。そのようにして「人間を学ぶ」身の定まった者は、現実社会に出てからも、働くこと、家庭生活を営むこと、公民としての役割を果たすこと、子どもを育てること、老いること、病になること、そして死ぬことにおいて、どこまでも分からない「人間」を学び続けるだろう。

働く意味再考

こうして生きるのは、自分がその身である「人間」を学ぶためであるとするならば、働くのも「人間」を学ぶためだということになる。ここで思い起されるのが「哲学と交わることは人生の日曜日とみなされる。：人間が一週間働くのは日曜日のためであり、一週間の労働のために日曜日があるのではない」という「ベルリン大学就任演説」におけるヘーゲルの言葉である（ズールカンブ版ヘーゲル全集第10巻、412頁）。個人・企業が生き残るために私人として働くこと、国家が生き残るため・世界の平和を実現するために公民として活動することは、現実社会という地盤で真剣に営まれなければならない。しかしそこではいかなる思想・目的も有限なものとして相互に対立・矛盾し、生成消滅を繰り返さなければならない。こうしたことが繰り返されるのが現実社会である。しかしこうした一見無意味な繰り返しと思われるものの只中に、救いと浄化と解決があることを教えるのが宗教・芸術・哲学である。生きる意味について言うならば、意味・無意味といったこちらからの意味付けを破って生の尊厳と死の厳肅さが現成するという根本的な経験に促されて、人間としての生死をどこまでも尋ねていく営みである。

生涯学習に向けて

人間にはこうした「人生の日曜日」が生涯にわたって必要である。宗教・芸

術・哲学の要求は人間の己むに已まれぬ要求だからである。「人生の日曜日」実現のためには①聖職者、②教会ないし寺院、③修道院ないし僧堂、に相当するものが不可欠であろう。①の聖職者は「役に立つ」ということを離れてひたすら「人間」を学ぼうとする者である。こうした根本的な動機があれば学問分野は問わない。哲学に関して言えば、先行研究を引き継いで、新しい知見を公表することを通じて社会に貢献する所謂「研究者」とは別に、役に立つ（貢献）とか業績といったものから解放され、一方で時間をかけて原典を講読・議論し、他方で他の思想家等の名を出さずに自分の言葉で本質的な考察・議論を行う者のことである。理系に範を取った、業績を目的とした所謂「研究者」以外にこうした「聖職者」がいなければ、哲学は滅んでしまうだろう。

②はそうした聖職者が行う教育の場、一般人からすれば学びの場である。就学者については学校がそれに当る。現在義務教育課程において、愛国心の育成を含めた「国民」の育成のための「道徳」教育が行われている。「考える道徳」といながら、現行の道徳教育は結局徳目の教え込みに終わっているように私には思える。そうだとすれば特別に教科として道徳を設ける必要はない。学校生活の全体で徹底した修練・躰としての道徳教育を行えばよいであろう。徳目を考えさせるのではなく、体に覚え込ませる方がよいだろう。それ故教科としての道徳とは別に、あるいはその代りに、「人格の完成」を目指した「人間」を学ぶ一貫教科を設定することを提案したい。その際、思想としての宗教や芸術（文学を含む）、哲学がその内容となるだろう。社会人については、日曜日に教会に行くような感覚で、生涯学び続ける場が必要である。いずれも教育にあたるのは①の聖職者である。

③は、所謂「研究者」とそうした専門の研究を学ぶことによって職業に就くことを目的とした職業人教育を行う「専門大学」とは異なっており、老若男女を問わず、役に立つということや業績を離れて、学ばざるを得ないという要求に襲われて学ぶ者が集まる場所である。それは人間を学ぶ学部ということで言葉の本来の意味において人文学部（*studia humanitatis*）とか、「人間」形成＝教養（*Bildung*）学部と呼べるかもしれないが、現存する学部のイメージからは遠く離れたものかもしれない。私はこの発想をやはり「ベルリン大学就任演説」におけるヘーゲルの言葉に負っている。彼は以前の聖職者や修道僧に代わって、学の存立のために或る社会階層の生活がそれに捧げられる必要性を述べていた。その社会階層とは、具体的には利益に無関係に真理を探究する、哲学者を始めとする学者のことである。

さて、大学が職業人教育に大きく舵を切ったことはすでに述べたが、この流れは今後もっと具体的な形で義務教育課程にも波及するだろう。しかしそれでも「人格」を完成させる「人間教育」が終了しないうちに「職業人教育」を行ってはならないだろう。人間はこれで食っていきけるという道（専門）が示されると、それ以外のものを学ぼうとしなくなるからである。職業を意識した教育を義務教育課程に導入すればするほど、児童生徒は一般の教科を勉強しなくなる、あるいは「役に立つ」という観点からしか学ばなくなる、という問題が今後生じてくるだろう（あるいはそのようなことははや「問題」ですらないのかもしれない）。

こうした（ほとんど荒唐無稽で受け入れがたい）構想に対しては直ちに、グローバル規模のシステムの急速な発展の中で企業や国家が生き残るために、そのような教育は何の役に立たない、との反論が返ってきそうである。それに対しては、然り、まったく何の役に立たない、と答えるほかはない。しかし他の何かに役立つものは条件づけられた有用性である。その有用性はその「何か」にしか役立たず、その「何か」に奉仕しなければならぬ。これに対してはまったく何の役に立たないものは、逆にすべてのものに奉仕するが故に、すべてに対してもっとも役立つものとなるだろう（神がそうである如く、哲学もまたそうである、というのが、これまた「ベルリン大学就任演説」におけるヘーゲルの考えである）。これを、現実社会を「生きる力」に関して言うならば、深い睡眠が明日への活力となるように、魂の深みに触れることが結果として何よりの現実社会を生き抜く活力の源となるであろう。

あるいは「学ぶために生きる」ではなく「遊ぶために生きる」として、遊びこそが「人生の日曜日」とする考え方もあるだろう。しかし遊びのもつ自己関係的な構造（遊ぶために遊ぶ）はそうした構造を持つ「遊び」自体の意味が問われることになるだろう。これに対し「学ぶために生きる」とは、宗教における神奉仕の如く、どこまでも分らない「人間」を学び続けることに生きることを捧げる生き方である。そこにおいて我々の生は、思いを遂げた喜びというような自己満足にすぎないような喜びではなく、どこまでも深いものに触れる喜び、深い悲しみでありながら深い喜びであるような、そうした喜び（浄福）に与ることになるであろう。生死を超えるものは、そうした生死を超えた深みの体験よりほかにはないだろう。

こうした構想が荒唐無稽に見えるのは、我々の内に宗教・芸術・哲学の要求が目覚めていないからである。それ故こうした構想にとって焦眉の急であるの

が、学ばなければならない身である、という要求を我々の内に聞き届けることである。しかし人間は本性上、自らのうちにある矛盾から逃避する傾向を持っているから、どうにもならなくなるところまでいかなければ、自らのうちにある本性的な要求の声は聞こえてこない。こうした声が聞こえないうちは哲学や芸術も閑人の閑事業ということになるのだろう。宗教的要求もそうであるが、こうした要求は自己の側からはどうにもならないものである。しかし幼少のころから「人間」の深みに触れ続けさせることは少なくとも重要であろう。「人は何のために学び、何のために働き、何のために生きるのか?」、それに対して私は、働くのは生きるためであるが、人が生きるのは、どこまでも分らない人間に触れ、それを学ぶためである、と言いたいのである。